た。そして、私は一時は可成りに熱狂することの出來た教會には遠ざかつてゐる時代であつた。此「哀樂」は私をして少なからず慰め勵まして呉れた。何となれば意外にも此小著に對する好意ある理解者が多かつたから。今にして思つても眼が熱くなるやうに感ぜられる程、當時の追憶は私をして幸福と感謝の思ひを深からしめる。歌數でいへば僅かに百首に足らず、四六版三十頁の小册子に對して、猶數十行數百行の批評を書いてくれた人があつたからである。

此「哀樂」の歌は多くは明治四十三年の三月に上梓せられた處女歌集「收穫」に收められてゐるが、殘しておきたかつた作で、唯二三首丈逸したのがある。今その歌を考へ出さうとしてどうしても思ひ出せずにゐ

る。

此「哀樂」は皆散逸して仕舞つて私の手許には一册も殘つてをらぬ。

處女歌集「收穫」を上梓した年の五月一日に、私は栢野しげ子と結婚して西大久保二百一番地に小居を構へた。本書に收めた「わかき日」は主として「收穫」から採錄した。私は初めて棲みついた此西大久保の二百一番地の青樫の家から雜誌「詩歌」を發行した。それは明治四十四年の四月であつた。

私は第二歌集「陰影」を大正元年九月に上梓してゐる。明治四十三年以降大正元年迄の作をこの歌集から採錄した。

第三歌集「生くる日に」を大正三年九月に上梓してゐる。そして、その

同じ九月の十六日に、私の後繼者である長男透が生れた。

第四歌集「深林」を大正五年九月に發行してゐる。そして前年三月に弟を失ひ、その年の早春に一人の薄命な子供が生れて直ぐに死んでゐる。この兒は彌生と名づけておいたが、生れて直ぐにその日に死んだので、ただ果報なく名づけられたにすぎなかつた。「深林」の歌は大正五年より同三年の部に收錄せられてゐる。

大正六年の秋九月、私は父を失つてゐる。そして大正七年の一月に長女妙子が生れてゐる。雜誌『詩歌』は九十二號迄發行してその年の十月に廢刊して仕舞つた。私にとつて此の「詩歌」の廢刊は隨分に思ひきつたことであつた。

其後私は書齋から街頭に出で、更らに秩父の原生林に入つて、山林伐採の仕事をした。

これも隨分思ひきつたことであつた。そして、この秩父の原生林は私にとつては新しい世界であり驚異であつた。で、この秩父の歌の一部を大正九年の部に數十首收めてゐる。本書を「原生林」と名づけたのも一つはこれに因つてゐる。私の歌が原生林の青草の上に伐仆されたパの丸太のやうなものである。といふようなところからも名づけられてゐる。

私は餘りに性急であつた。餘りに粗野であつた。然しそれが私の自然であれば仕方がない。木の葉はおのづから風に鳴る。私の歌は

おのづから私の箇性によつてうち出される。唯私の此歌集に原生林の神秘はなくとも、樹木の香氣と感觸と一味相通ずるものがあればよいと祈つてゐる。私は前に歌集「深林」を出してゐる。私は此「深林」以前の歌と「深林」以後大正十年迄の歌とをあはせて、本書自選歌集を出すことに決した。

私は隨分これ迄多作家として自分も許し、人も許してゐた。選集も二三册出してゐる。が、大正十年迄の選集は此集を以て或る意味に於ける第一の選集としたい。そして、同時に私の處女歌集としたいと思ふ。

自分の舊作で、その當時雜誌や新聞に發表したまゝで、忘れて仕舞つ

たり、また散逸して仕舞つたりして、歌集を編むときに收錄することの出來ぬ歌がある。それを意外にも記憶してゐてくれた人がある。古い文章世界に載せた歌で、「感電したる工夫の死」といふ一連作があつた。この歌は自分には餘りにとれさうもなかつたので歌集には載せなかつたが、ある人が、その歌をよく記憶してゐて、なぜ載せなかつたと責められたことがあつた。私は鳥渡意外にも思ひ喜ばしくもあつた。それから尾山篤二郎君が大正八年度の「短歌日記」の附錄に、「續明治歌壇概觀」といふのを書いてゐる。それに明治四十三年頃の私の歌を四首拾ひあげて批評してゐる。その歌は

物いひの荒き人等にうちまじり洪水あとの町を見に行く

水さわがずふかぶかと行く出水後の大川端に啼く家鴨あり

赤き帶ひとつまよへり洪水の町を見に行く群衆のなか

濁りたる假避難所の群衆のなかにただよふ赤兒泣くこゑ

（「創作」第一卷）

の四首である。この歌なども自分はすつかり忘れてゐた。尾山君に拾ひあげられて初めてさうかと氣がついたやうな次第である。無論佳いものではないが、私の初期の作として遺しておいてもよいかと思ふ。

それからもう一つ、長谷川福平氏によつて拾ひあげられてゐた歌が一首あつたことを知つた。

夏雲雀空にのぼりてかそかなり麥の穗波は日にかがよひつ

この歌は大正七年の作で「玄倉山」に入れておいた。此外、ただその時折によみ捨てた歌で、自分では忘れてゐる作もあると思ふが、兎に角歌をよみ初めてから大正十年迄にいたる全部の歌數は約數千首にのぼることであらうとおもふ。今はそのうちから四百四拾五首を自選することにした。自分では割合に氣持よく此歌集を世におくり出すことが出來るのを喜んでゐる。（大正十四年盛夏八月、雜草園にて）

巻末小言補遺

大正十年の巻頭の「雲雀」の歌は、深川より月島にわたる手前に、その頃は道に沿うた芦原があつて、海につづいてゐた。そこで雲雀を籠より空に放つて静かに聴いてゐる人々の群れをみて、私もその群に入つて小半日遊び暮したことがあつた。その時の歌である。で、この雲雀は野の雲雀ではない。

それから同じ十年の「夏花抄」のユクカは私の庭にある花で、普通糸ひき蘭と言つて、噴水のやうに中心から長い青い葉を盛上げて垂れ光つてゐる蘭科植物で、花莖抽くこと九尺餘り、六月の頃乳白色な鈴形の花

を一面につけるさまはまことに雄大である。

大正九年の部の「山原に人家居して子をなして老いゆくみればいのちいとほし」の山原は山の中腹の稍平らかな高原を意味してゐる。やまばらとよまず、やまはらと讀みたい。

大正七年の「冬川」のうち河原畑といふのがある。これは河原に水菜をつくつてあるのをいふので、その水菜の畝の間を水がさうさうと流れてゐるのである。

また「玄倉山」その二に夏雲雀といふ言葉を使つてゐるが、これは初夏の頃に寂しく啼く雲雀である。私はこの雲雀を愛するのである。

大正六年の「相模の歌」に「うつばりに青き烟草を吊したりそのもとに

ゐて樂しかるべし」といふのがある。これは畠の烟草の木を根元からすぱりと鎌で刈り取つてきて、乾燥せしめる爲めに、屋内の梁に逆しまに一面に吊す。さながら烟草畑を上にひろげたやうだ。で、その青い烟草畑を空にして、寢たり起きたり、食べたりする、これを木がらしと言つてゐる。

大正五年の「冬日集」に「太陽はほのぎらひつつのぼりけり馬圓をゐがく雪光る野に」といふ一首がある。これは四五首の連作のうちの一首なので説明がないとわからぬ。赤いジヤケツをきた若者が雪の晴れた野で長い手綱を引張つて、馬を馴らしてゐる。馬はその若者を中心にして圓を描きながら走るのである。

大正十四年十月一日印刷
大正十四年十月五日發行

原生林

定價一円八十錢

著者　前田夕暮

發行者　山本美
東京市芝區愛宕下町一丁目一番地

印刷者　松井勇
東京市芝區愛宕町二丁目一番地

版權所有

發兌　改造社
東京市芝區愛宕下町一丁目一番地
振替東京八四〇二番
電話高輪四九九三番

現代代表自選歌集

第一回			
齋藤茂吉著	朝の螢	定價	一・五〇
島木赤彦著	十年	定價	一・五〇
古泉千樫著	川のほとり	定價	一・八〇
中村憲吉著	松の芽	定價	一・八〇
折口信夫著	海やまのあひだ	定價	一・八〇
木下利玄著	立春	定價	一・八〇

第二回			
北原白秋著	人間往來	定價	一・八〇
與謝野晶子著		近刊	
窪田空穂著		近刊	
若山牧水著		近刊	
前田夕暮著	原生林	定價	一・八〇
土岐善麿著	空を仰ぐ	近刊	

544
120

終